九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

コレージュ第６学級フランス語カリキュラム ： 翻訳と解説

飯田, 伸二

https://doi.org/10.15017/8812

出版情報：Stella. 25, pp.33-45, 2006-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

コレージュ第6学級フランス語カリキュラム
――翻訳と解説――

飯　田　伸　二

以下に紹介する資料は，フランスのコレージュ第1学年にあたる第6学級のフランス語現行カリキュラムである[1)]。数年来，フランスでは中等教育のあり方，とりわけフランス語教育のあり方について国民的議論ともいえる論争が展開されている。コレージュやリセのフランス語カリキュラムに対する批判の例は枚挙にいとまがない[2)]。メディアが大々的に報じた最初の動きは，2000年3月4日付の「ル・モンド」紙にミシェル・ジャルティ，ミシェル・ザンクの呼びかけに応じた100名近い作家，知識人，文学研究者の連名で発表された「グルネル通り〔＝文部省〕が文学を暗殺する」である[3)]。このマニフェストは，リセ第1学年に当たる第2学級のフランス語カリキュラムの大幅な改正，およびそれにともなうバカロレアの試験形式変更案（フランス語前倒し共通試験でのディセルタシオン廃止）に対する大学側からの抗議運動と見なすことができる。ただしメディア上の論争では，リセのカリキュラムとバカロレアの出題形式に注意が集中しすぎてしまった。その結果，数年来のフランス語教育を巡る議論では，問題の真の重大さがしばしば見逃されがちである。

リセ第2学級のフランス語カリキュラムは，2000年新学期から大きく様変わりした。その後，若干の改訂が施されてはいるが，あくまで試運転後の微調整のようなものであり，当初確立した枠組みに根本的な変更は見られない。同年6月から実施されている新形式のバカロレアのフランス語前倒し試験からディセルタシオンが消えることはなかったが，ディセルタシオン，コマンテール・コンポゼと並んで，創作文が導入された[4)]。リセ第2学級のカリキュラム，バカロレアがそれぞれ大きく様変りしたのは，コレージュのカリキュラムおよびコレージュ卒業学年で実施されるブルヴェ（前期中等教育修了証書）と，内容・形式上の一貫性を担保するためである。さらにリセのフランス語カリキュラム

全体の改訂が一段落するや，小学校でも2002年からコレージュの現行カリキュラムに対応したカリキュラムが施行されている。

近年のフランス語カリキュラム改訂の経緯から推察できるように，1996年から施行されているコレージュ第6学級現行カリキュラムこそが，初等・中等教育のフランス語教育全体の方向性を決定づけているといっても過言ではない。このカリキュラムを皮切りに，現行のカリキュラムがほぼ1学年ごとに整備されてきたからである。この重要なカリキュラムの意義・問題点については既に別稿で論じたので[5]，本稿ではこの資料の理解に不可欠と思われる歴史的背景について若干の情報を提供するにとどめたい。

以下に訳出したカリキュラムを一読すれば，一般的な12歳の生徒を対象にしたフランス語カリキュラムのなかに現代テクスト理論をかくも大胆に盛り込んだことに驚嘆・当惑する向きも少なくあるまい。しかし，いかに衝撃的であろうと，専門性の大胆な導入は現行カリキュラム最大の改革点ではない。

現行カリキュラムは，その教育内容においてコレージュを，初等教育を終えた生徒をあまねく受け入れる教育機関として位置づけた，フランス教育史上最初のカリキュラムである。この点にこそ現行カリキュラムの歴史的な意義がある。周知のとおり永らくフランスでは，小学校卒業時で進路が分かれる複線型教育システムが採用されてきた。1960年代に入ってさえも，リセの前段階と位置づけられ，リセ進学を希望する生徒を主に受け入れる新制コレージュ（CES = collège d'enseignement secondaire）と，一般の生徒を受け入れる普通教育コレージュ（CEG = collège d'enseignement général）が併存していたほどである。小学校を卒業した生徒を分け隔てなく受け入れる機関が設置されるのは，ようやく1975年，つまりいわゆる「統一コレージュ」が施行されてからのことなのである。

生徒の増大に対応するため，1965年から1975年にかけて2,354ものコレージュが建設された[6]。だが，こうした施設面での対応とは裏腹に，カリキュラムの点ではコレージュは，「統一コレージュ」施行以後もあくまでエリートの集うリセの準備段階として認識されつづけ，中等教育の民主化・大衆化に十分に対応してきたとは言いがたい。たとえば，コレージュ第6学級の旧カリキュラム（1985年）は，安易に生徒のレベルに合わせるのではなく，生徒の関心を常により高次な学習内容に導くよう促している――

肝心なのは生徒の手の届く所に留まることである。しかしこれは生徒のレベルに留まるという意味ではない。適度に野心的でいよう，そして常に厳しくあろう。[7)]

旧カリキュラムの文面と現行カリキュラムのそれとを比較すると，旧カリキュラムでは見受けられた「知性」「抽象・論証能力」「批判精神」「正確さ」「厳密さ」「個人学習」「方法の習熟」「野心的」といった表現が現行カリキュラムから姿を消したことが確認できる。このことは，現行カリキュラムが，バカロレアで課せられるディセルタシオン，コマンテール・コンポゼに必要な思考力・文章力・文学史的教養を身につけるべく組織されてきた従来のコレージュやリセの教育に根本的な軌道修正を施したことを強く示唆する。

じじつ，現行カリキュラムでは，人文主義的教養への志向が著しく後退したのに呼応して，学習内容が過密にならないよう教員に注意が促されている――

規定の学習項目のなかから最適な選択をするのは教員の権限である。〔…〕だからといって，カリキュラムの内容を重くしてはならない。[8)]

さらに現行カリキュラムでは随所で，小学校最終学年での進度が示され，学力不足のままコレージュに進学してきた生徒には「補習」を行うよう指示されているのだ。

新旧の比較からも現行カリキュラムが，教育システム全体に占めるコレージュの位置づけの変化に対応したカリキュラムであることがうかがえる。政権担当政党の交代，現在のフランス語教育への幾多の批判にもかかわらず，コレージュの現行カリキュラムが10年以上もその大筋において踏襲され，リセ・小学校のカリキュラム改訂のさいに参照されてきた理由は，これが中等教育の一般化に対応すべく練り上げられた，フランスにおける最初の試みであるからにほかならない。

註

1）Ministère de l'Éducation nationale, de l'Enseignement supérieur et de la Recherche, «Programme du cycle d'adaptation : classe de 6e. Le français au collège», in *Enseigner au collège. Français : programmes et accompagnement*,

Paris : CNDP, 2005, pp. 14–23.

2）拙稿「対談集『教師は弾劾する』」,「ステラ」第 21 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2002 年 12 月，181–184 頁；「『デバ』誌特集号「フランス語をどう教えるか」,「ステラ」第 24 号，2005 年 12 月，175–179 を参照。

3）«C'est la littérature qu'on assassine rue de Grenelle», *Le Monde*, 4 mars 2000, p. 18.

4）創作文については，拙論「岐路に立つフランス語教育――新プログラムが問いかけるもの」,「日仏教育学会年報」第 8 号，2002 年 3 月，64–75 頁を参照。

5）拙論「母国語の再構築――コレージュ第 6 学級の現行フランス語カリキュラムをめぐって」,「日仏教育学会年報」第 12 号，2006 年 3 月，57–67 頁を参照。

6）戦後のコレージュ改革の歩みについては，Antoine Prost, «École et stratification sociale. Les paradoxes de la réforme des collèges en France au XXe siècle», in *Éducation, société et politiques. Une histoire de l'enseignement de 1945 à nos jours*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Points / histoire», 1997, pp. 84–113 に明解な見取り図を求めることができる。

7）Ministère de l'Éducation nationale, de l'Enseignement supérieur et de la Recherche, *Classe de sixième. Programmes et compléments*, Paris : CNDP, coll. «Horaires, objectifs, programmes, instructions», 1987, p. 24.

8）«Programme du cycle d'adaptation : classe de 6e. Le français au collège», op. cit., p. 14.

〔資料翻訳〕

適応課程のカリキュラム：第６学級

コレージュにおけるフランス語

従来のカリキュラムは，言語の習熟，教養の育成，方法の修得という，３つの重要な軸に沿って構成されていた。新カリキュラムにおいても，これらの重点目標は存続する。だがこれらは，より正確で客観的なテーマである，ディスクールの習熟に包含される。ディスクールとは，筆記もしくは口頭でのコミュニケーション行為における，あらゆる言語の実践化である。

ディスクールという概念により，学習のさまざまな側面と多様な内容を結ぶことができる。この概念は言語にかかわる作業とテクストにかかわる作業，読書活動と作文活動を関連づける。

コレージュ４年間の進度が指示してある。大事なことは，それぞれの学年で，不必要な繰り返しと不適切な先取りを避けることである。しかしフランス語教育を年代順，論理的順序に従って組織することも，内容の厳密な確定に基づいて決定することもできない以上，教員は毎年，〔カリキュラムが示す〕全体的な枠組みをもとに，教育上の進度を自由に構想することになろう。こうした考えに立つばあい，一定の知識やある程度の能力は必ず習得されねばならないことになる。そうでなければ，既定の学習項目のなかから最適な選択をするのは教員の権限である。個々の教員は，学習状況や学習計画に応じて他の選択をすることもありうる。だからといって，カリキュラムの内容を重くしてはならない。

文章を産み出す活動でも，理解する活動するでも同じく，口頭・筆記での生徒による実践が中心である。

判断力の養成，美的感受性の覚醒は互いの均衡を取りながら行う。

Ⅰ．最終目的と具体的目標

A． コレージュにおけるフランス語教育の最終目的とは，個人がそれぞれの個性を育成し，自覚的かつ自立的な，責任感のある市民にならしめることである。

今日コレージュは，すべての生徒に共通するものとしては最も高い教育水準にある。コレージュ卒業後，進路は枝分かれし，もはや生徒たちは社会生活の一員となっている。それゆえ彼らは，自らの判断に確固とした骨組みを与え，自分の意見を表明でき，想像力を豊かにするために，まとまった基礎的知識を修得しておかなければならない。

B． こうした視野に立ち，コレージュの具体的目標は生徒にディスクールの基本的な形態を習熟させることとする。その重点目標とは――

生徒が口頭，筆記で理解でき，明確に表現できるようにすること。

共通の教養のもっとも基礎的な要素を提供すること。

Ⅱ．進度と全体的方向性

A．まず，ディスクールの形態とは物語，論述の 2 つの軸に沿って分類可能である。ディスクールのさまざまな形態は一般的には入り混じっている。だが，この区分はディスクールの形態を生徒に理解可能なものにするには有効である。

コレージュにおける全体的な進度は以下のようになる。

・第 6 学級――語りの部分と論述の部分を識別する。さまざまな形式の物語を読み，産み出し，学習する。論述の観点から口頭表現を練習する。
・第 5 ～ 4 学級――物語の分野では，物語の学習を続け，描写へと学習を拡げる。論述については，説明的ディスクールの学習に取り組む。
・第 3 学級――論述の領域では，主な論証形式を学習すること。物語の領域では，さまざまな形式の物語を自ら産み出す機会を増やすこと。

読書カリキュラムについて。その進度は歴史のカリキュラムと連係して決められることとする。

B．コレージュでは言語の学習は独立した目的ではなく，ディスクールの習熟という具体的な目標に従属する。それゆえ，言語の学習はコミュニケーションの状況を考慮して行われる。教育現場では，言語の学習は読書・作文・口頭表現と関連づけて行うようにする。これにより言語の学習に割かれていた個別の時間は，この分野における生徒の必要・能力にもっとも適当な進度と一体化するだろう。

C．フランス語には他の科目と関連する分野がある。

・文法――フランス語では，古典語や現代語と同じく，文法をテクストや口頭での実践的活動と結びつけるよう配慮する。機会があるごとに，フランス語の文法と，学習中の他の古典語もしくは現代語の文法とを比較すること。
・イメージ――イメージはさまざまな科目で同時に学習される。芸術的な取り組みは美術教育の目的に含まれる。イメージは意味を持つ。フランス語では，テクストとイメージの関連を把握することを目指す。
・新テクノロジー――技術科やパソコン教室と連係して，ワープロの初歩教育やデータベースの閲覧を推奨する。
・基本的な文化的対象――これらの学習は歴史の学習とも関連する。過去の遺産に開かれた基本的テクストは，コレージュのそれぞれの学習課程で歴史のカリキュラムと関連づけて決定される。
・公徳教育――テクストの読解によって，フランス語は価値の世界の考察に寄与する。ディスクールの習熟により，フランス語は自己の意見を述べ，対話の相手を考慮することを可能にし，他者を尊敬するように導く。こうしてフランス語は市民教育という一般的使命に参画するのである。

Ⅲ．知識と能力

修得すべき知識は，それを実現する能力と切り離すことはできない。生徒は歴史的・理論的知識を修得しつつ，自らの言語活動によってその実践をしなければならない。したがって，各学年で特に重要なのは，生徒が認識し理解できること（受容的知識）と，習熟していること，つまり生徒が身につけ，産み出すことができるもの（活動的知識）とを区別することである。それゆえ，第6学級では，単純な論理的文章を見分け，概ね理解できれば十分である。しかし反対に，物語の基本的メカニスムについては，生徒は単に見分け，理解するだけでなく，筆記・口頭表現において，習熟しておかねばならない。第3学級では，論述の技法についてもこの同じ目標が達成されなければならない。

コレージュの学年を経るにつれ，生徒はますます余裕をもって読書や作文，口頭発表ができるようにならなければならない。おもに読書，作文，演劇・詩作の活動を介して生徒はさまざまなタイプのディスクールについての知識を段階的により豊かなものにする。

生徒がこの活動的習熟に到達するためには，次のような課題を与えることが必要である。

・口頭で言表を組み立てる。
・完結した作品を読む（とても短いものでも構わない），段階的に複雑なものを読む。
・自身で整った文章を書く。生徒個人が創作する作文に，当然それが値する重要性を認める。

Ⅳ．第2言語としてのフランス語のケース

全体的な目標は外国人生徒をフランスの教育システムに統合することにある。

外国語を母国語にもち，フランスに来て間もない生徒で，これまで一度も学校教育を受けていない者は，特別な機関で必要に合った教育を受ける。

フランスに到着して日の浅い生徒で，すでにフランス語以外の言語で学校教育を受けたことがある者は，学力評価テストを受けた後，通学する学校でフランス語の補習授業を受ける。補習授業はフランス語の知識によって当該の生徒をクラス分けして行う。

学習内容，教授方法は母国語としてのフランス語教授法および，外国語としてのフランス語教授法に求める。

第6学級カリキュラム

全体的目標

上に定義されたコレージュの最終目的と進度にもとづき，第6学級においては，物語の学習を特に重視する。さらに生徒は論述文の初歩を学ぶ。

物語文に接し（読む，聞く），作り出す（言う，書く）ことが重要な位置を占める。また論述文を読み，識別すること，自らの見解を口頭で発表することも同じく重要である。

美的感受性を呼び起こし，読書し，文章を書き，話をすることを好きになるようにす

ることは，学習活動の一大目標である。

Ⅰ．読み

A．具体的目標

・読書を一層好むようにすること。
・あらゆる種類の文章を読むこと。
・物語固有の一貫性を理解すること。
・共通の教養の鍵となる要素，すなわち我々の文明のローマ＝ラテン的，ユダヤ＝キリスト教的起源を身につけさせること。

B．読書の実践

第 6 学級進学時に，生徒は言葉と文章を即座に理解できるようになっているはずである（文章のテーマ，おおよその内容の把握）。また論理的な理解（ある文章を組織している〔言葉の〕関係の把握）もできるようになりはじめているはずである。

この分野における第 6 学級の目標は生徒が論理的な理解ができるようになり，言外の意味を認知できるようになることである。

即座に〔文章を〕理解できない生徒には補習学習活動を実施する。

1．能力とその適用

能　力	適　　用
走り読みする	走り読みは個人的読書の一般的な方法である。文学的であるなしにかかわらず，多様な文章を対象とする。そして常に教室で行う活動に含まれる。
文章全体を通して学ぶ	作品全体の読書。同一作品について 4 週間から 6 週間を超えない。 短い文章を細かく読み込む。

これらの読書形態は学年を通じ，互いのバランスを取って行われる。文学作品については，美的観点に常に配慮する。読書は口頭あるいは筆記による文章表現の練習や，言語習熟を目的とする作業と関連づけて行う。文章のジャンル，読書の狙いに合わせて，読書戦術〔＝読書の仕方〕を適応させる。

物語形式の文章を学習することで，作者，話者，登場人物，物語の基本構造といった基本的概念が導入可能となる。

2．読むべき文章

a．古代の遺産から伝わっている作品

『聖書』，ホメロス『オデュッセイア』，ウェルギリウス『アエネイス』，オイディウス

『変身物語』。

歴史のカリキュラムと併行して，これらの作品の学習は抜粋を利用して行われる。もちろんこれらの抜粋は作品全体と関連づけて解説される。学習は翻案で行うこともできる。

b．ジャンルへのアプローチ

・コントもしくはおとぎ話。フランス文学もしくは外国文学から選ばれた作品を学年で少なくともひとつは読む。
・数編のラ・フォンテーヌの寓話を含む詩的文章。学年を経るごとに，それぞれの生徒が個人的な挿絵入りアンソロジーを編纂するか，小学生の時に始めたアンソロジー編纂の継続が推奨される。
・いくつかの演劇の抜粋，あるいは場合によってはフランス語の短い芝居。可能ならば，学習は生徒による上演にもとづいて行われる。対話の学習やジャンルとしての演劇のより踏み込んだ学習は後年にとっておく。

c．青少年向け文学

この分野では一年を通じて少なくとも一作品を読む。カリキュラム解説には参考までに作品リストが提示してある。

d．資料の読解

生徒は資料や教科書，辞書を日常的に使えるようにならなければならない。学年終了時には，アルファベット順の索引や目次による検索をマスターしていなければならない。この訓練は可能な限り司書と共同して実施される。

e．文章とイメージ

生徒たちは，静止画像と結びついた文章（挿絵付き文章，写真と文章，漫画）と，動画と結びついた文章（テレビ・映画）を少なくともひとつは使って，イメージと文章の関連を観察する。古代の有名な神話に接するための文章読解は，図像資料の学習，歴史的建造物あるいは美術館の見学を通じて行われる。

Ⅱ．作文

A．具体的目標

・書く喜びを育む。
・書き言葉で自己表現し，コミュニケーションを取る能力を高める。特に文章は１人，もしくは複数の受け手に合わせて書かれるものであることをよく理解する。
・首尾一貫した，まとまった文章を書くことができる。
・物語ることをマスターし，描写の初歩を学ぶ。

B．作文の実践

第６学級進学時に生徒は文章を産み出すこと，考えを関連づけること，段落を配置することに習熟しているはずである。このレベルに達していない生徒や，基本的な綴り字をマスターしていない生徒には，補習が実施される。第６学級の目標は１ページ程度の

首尾一貫した物語文を書くことにある。

1．能力とその適用

能　力	適　　用
資料に名前をつけ，整理する	個人資料の整理整頓（バインダーの使用）
文章の読みやすさを確保する	文章のレイアウト（段落，改行），明確で規則的な書き方，コードの違いの習熟（文字，数字，句読点），綴り。
文章を書くこと	時間の流れに沿った物語文を産み出すこと。
語りと描写を組み合わせること	語りの中に短い描写的な一節を挿入すること。

作文練習は頻繁かつ定期的であるべきである。この練習は学年の最初から実施される。ワープロの使用は貴重な補助となりうる。言語の学習はとくに生徒による作文にもとづいて行われる。

2．書くべき文章

a．自身にむけて

・記憶にとどめたことを書く（ある文章，資料，あるまとまりから，出典とともに）。
・リスト，表の完成
・下書きを書くこと，もう一度書き直すこと。
・短い話し言葉を書き言葉に書き換えること（生徒自身が発したもの，生徒が耳にしたもの）。

b．他者にむけて（指定された個人，既知の集団，個人化されていない全体）

・具体的な媒体からの物語（イメージ，物，音声資料，等々）。
・神話，英雄から取られた物語。
・個人的な経験を紹介する物語。
・語りの手紙。
・模倣文（物語，手紙，雑誌・新聞の記事）。

1学年を通じ，生徒はさまざまな状況の中で，これらすべてのタイプの文章を実践すること。

Ⅲ．話し言葉――聞くこと，話すこと

A．具体的目標

書き言葉と同じく，話し言葉は言説の習熟にとり，きわめて重要である。第6学級の

子供たちは定期的に文書を書かねばならないのと同じく，たとえ短くとも頻繁に発言しなmければならない。重要なことは，個々の生徒が個性的かつ，理路整然と話すことができるようになることである。教室では，言葉が飛び交わねばならない。また，個々の生徒は発言する前に他の生徒の話を聞くことを学ばねばならない。
話し言葉では以下の目標に狙いを定める。
・聞くこと，特に他者の言葉を考慮すること。
・意見交換をしながらコミュニケーションを取ること。
・理路整然と意見を表明すること。
・経験を再現すること（読書，映画，見学，等々）。

B．話し言葉の実践

小学校の習熟課程で，生徒たちは話の構成や一貫性，明確さの点で上達すべく，話し言葉の練習を行ってきた。必要に応じ，これらの能力の補習を行う。

この分野における第 6 学級の目的は，生徒が話し相手を考慮できるようになること，そして自分が発言する際には，聞き取り・理解可能な話しができるようになることである。

1．能力とその適用

能　力	適　　用
聞くこと	他者の発言の尊重。適切な発言。 話し言葉による言表を話し言葉で紹介する。
問いかけることと答えること	完全な文で質問する。 完全な文で応答する。
発表すること	文章の音読。 話し言葉での描写。
語ること	話し言葉での報告。
文章を再現すること	暗記した短い文章を暗唱する。

2．聞くべき，朗読すべき文章

生徒は学年をつうじて，以下のような話し言葉による活動に参加しなければならない。
・散文，戯曲の一節，詩など，学習の対象となった文章の暗唱。
・語り――これによって読書，見学，映画，音声資料の報告が可能である。
・描写／物，資料，歴史的建造物が対象となりうる。
　ある観点の紹介と根拠づけ，短い質疑応答といった活動も可能である。

読書，作文，話し言葉の実践のための言語ツール

Ⅰ．具体的目標

前文に示した全体の進度では，言語の学習はつねに読みや作文，話し言葉と結びつけられており，第 6 学級では，主に語りの実践と関連づけられている。具体的な学習目標は，語りや描写に必要な語彙，文法的ツールに習熟すること，そして論証がどこにあるのかを単に識別できるようになることにある。

基礎知識は以下に一覧表の形で示してある。授業での進度は教員が決定する。

Ⅱ．内容

ディスクール

・多様で，意味のあるコミュニケーションの状況を活用することで，基礎的な知識，すなわちメッセージや発信者，言語のさまざまな調子，コミュニケーションの状況を示す語などを指摘できる。
・ディスクールの構成と一貫性。
・識別すべき，ディスクールの 3 つの形態：語り，描写，論証。
・語り，描写ディスクールにおける動詞の時制の価値〔＝意味，効果〕，特に現在，半過去，複合過去，単純過去の価値。
・名詞の代用語（名詞そして代名詞による言い換え）。
・句読点／文章を文に分け，文を節に分けること。
・文／動詞文と無動詞文。
・文の形態（平叙文，命令文，疑問文，感嘆文）。
・節（独立節，主節，従属節）。

形態統辞論

・単語のタイプ〔＝品詞〕／名詞，動詞，形容詞，おもな限定辞。
・機能――
　名詞に関連して／付加形容詞，名詞の補語，同格。
　動詞に関連して／主語，主語の属詞，目的補語（直接・間接，第 1 ・第 2 ），状況補語（場所，時間，原因の状況補語）。
・直説法の活用（現在，未来，半過去，単純過去，複合過去，大過去）および命令法，条件法，接続法の現在形――
　動詞／être と avoir。
　第 1 群規則動詞と，第 2 群規則動詞。
　使用頻度の高い不規則動詞（aller, devoir, dire, faire, falloir, prendre, savoir, valoir, venir, voir, vouloir）。

語彙

・語彙，特に時間，空間，感覚の語彙の充実。
・単語の学習／一般的な意味と文脈上の意味，同義語，二重語，反意語，単語の構成（接頭辞，語幹，接尾辞）；語源（時間，場所の語彙場に属するギリシャ語，ラテン語の

語根，ラテン語から借用された成句)。

綴り

・節の中の一致／主語―動詞，主語―属詞。
・名詞句の中の一致。
・助動詞 être との一致，助動詞 avoir との一致（学習中)。
・動詞の形態（活用で学んだ時制)。
・単語の綴り／（明解な語源から出発して）すでに学んだ語彙の言葉。
・頻出する語彙上および文法上の同音異義語。